

私が引き受けた

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書7章11～17節

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される場所だった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心に掛けてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

[序] 「死」は、信仰を求める扉でもある

ルカによる福音書を、「聖書教育」誌に沿いながら毎週味わっています。私がこの教会のあり方で、いいなあと思うことの一つは、まず水曜日夜の祈り会、また日曜日は教会学校の時間で、そしてそのあとの礼拝の中で、同じ聖書箇所から分かち合うことが出来ることです。特に祈り会や教会学校の時間では、牧師だけの話というのではなく、そこに参加する方々が自由に、その箇所との関わりから示されたことなどを語って下さるので、とても良い交わりの時間になりますし、みことばは一体何を今この自分に語ってくれているのだろう、と一緒に聴き、分かち合う恵みの時間になっていると思います。皆様も、是非、年に一回でも二回でもご一緒に分かち合う時を持ちませんか？

この間の水曜日も、今日の聖書箇所から色々な話になったのですが——特に、人間がいつか迎えなければならない「死」の恐ろしさ、悲しみ、不条理といったことが話題になりました——そのメンバーの一人が、「神様という存在は『死』を解決してくれる存在であって欲しいと思い、信仰を求める気持ちも芽生えてきた」というようなお話をして下さいました。

本当に『死』というものは、私たちの理解を超えたものであります。得体が知れないもの。しかし確実に、私たちのこの人生の「一部」でもあります。それだけに、死を考えることが、神様や、信仰のことを求め始めたりする大きな「扉」のようなものになるということは、私たちの人生にとって大切なことだと改めて思いました。

[1] エリヤと、あるやもめの息子の生き返りの物語

さて、今日の箇所ですが、今日の箇所の前にも、ローマの百人隊長の、病気で死

にかかっていた部下が、イエス・キリストによって、遠く離れていたにもかかわらず癒されたという奇跡の物語が記されています。この時、イエス様は、切実に部下の癒しを願う百人隊長の真剣な思い——「ただひと言おっしゃって下さい。そして部下を癒して下さい」との懇願——に心を動かされて癒しをなさいました。そして「それから間もなく」と続いています。約 30 キロ離れている**ナインの町**ですから、歩いて一日かかるのですが、私の想像ですが、これはたまたまというのではなく、イエス様の心の中には、この**独り息子を失った母親に会いに行く**という目的があったのではないのでしょうか？

ルカ 4 章の最後から、イエス様の様々な癒しの出来事が記されています。癒し主イエス様は、自ら足を運び、旅をしながら人々を癒されています。今日のこの**やもめの一人息子を生き返らせる物語**は、8 章にある**会堂長ヤイロの一人娘を生き返らせた物語**と併せ、イエス様の奇跡物語のクライマックスの一つと言ってよいと思います。

そしてこの物語ですが、当時の人々は「この話は聞いたことがあるような話だなあ」と思ったに相違ありません。この物語の最後の方に、「神を賛美して『**大預言者が我々の間に現われた**』と言い」(16 節)とあります。このときずっと周囲の人々は、旧約の**預言者エリヤ**のことを思い起したと思います。**列王記上 17 章**に、とても似通った奇跡物語が書いてあるのです。その聖書箇所を見てみたいと思います。

「その後、この家の女主人である彼女の息子が病気にかかった。病状は非常に重く、ついに息を引き取った。彼女はエリヤに言った。「神の人よ、あなたはわたしにどんなかわりがあるのでしょうか。あなたはわたしに罪を思い起こさせ、息子を死なせるために来られたのですか。」エリヤは、「あなたの息子をよこしなさい」と言って、彼女のふところから息子を受け取り、自分のいる階上の部屋に抱いて行って寝台に寝かせた。彼は主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。」彼は子供の上に三度身を重ねてから、また主に向かって祈った。「主よ、わが神よ、この子の命を元に戻してください。」主は、エリヤの声に耳を傾け、その子の命を元にお返しになった。子供は生き返った。エリヤは、その子を連れて家の階上の部屋から降りて来て、母親に渡し、「見なさい。あなたの息子は生きています」と言った。女はエリヤに言った。「今わたしは分かりました。あなたはまことに神の人です。あなたの口にある主の言葉は真実です。」(列王記上 17:17~24)

このエリヤによる奇跡の話も、イエス様の奇跡の話も、あるやもめの年若い一人息子が死んでしまったけれども、また生き返ることになったという出来事であり、また、息子が生き返った後その子の体を、母親に渡したという具体的な仕草まで良く似ています。ですから、ルカ福音書の方の出来事を目の当たりにした人々は、恐

らく「エリヤの再来か」と思ったのではないかと思うのです。けれども、イエス様がなされた奇跡のわざは、旧約のエリヤの物語とは**決定的に異なる**ところがあります。それを見てゆきたいと思います。

[2] その御言葉をもって

エリヤの話の方は、これはエリヤが、やもめの怒りにも似た訴えに心動かされ、その死んだ息子を受け取って、「神よ、あなたは、わたしが身を寄せているこのやもめにさえ災いをもたらし、その息子の命をお取りになるのですか。…この子の命を元に返してください。」と、その体に自分の身を三度も重ねる事までして（それ自体、律法に禁じられている死体に触れる行為になりますから、大変なことなのですが）、**懸命に神様に祈っています**。つまり、エリヤは**ひとりの預言者、限界ある人間として、必死に神様に訴えている**のです。

けれどもイエス様の方はどうでしょうか。13節以下にこのようにあります。——「**主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。**」

皆さん、何を感じますか？ イエス様の言葉と振る舞いの中に、大きな**権威**を感じないでしょうか？ 私はそれを思いました。例えば、「もう泣かなくともよい」という言葉。このような場面で、こんなことを言える人とはどのような人か、と思います。少なくとも赤の他人にはこう言えませんね。「もう泣かなくともよい」。親しい友達であってもそうは言えないでしょう。一緒に泣くことは出来ても、**もう泣くのをお止めなさい**、とは言えません。この言葉は、**その悲しみと嘆きの涙を、ご自分が引き受けなければ言えない言葉**ではないでしょうか？ 私は、凄いなと思うのです。

そして、イエス様は、「**御言葉をもって**」死んだ者を生き返らせました。誰が一体、直接死んだ者の魂に声をかけることが出来るのでしょうか？ 「若者よ、あなたに言う。**起きなさい**」、と。周りの者たちはその言葉をどう聴いたのでしょうか？ 一瞬、固唾を呑んだのではないかと思います。その言葉はきっと、**権威ある響き**で聞こえたことでしょう。聖書はこう続けます。「**すると、死人は起き上がってものを言い始めた。**」もう死に定まったと思われていたこの少年の体が、その瞬間起き上がり、生命溢れる若者のまま、まるで今眠りから起された者のように、普通に声を発したと言うのです。

これは、**神様のみ言葉が、出来事を起こす＝生起させる**ということを示す以外のことではありません。旧約聖書・創世記の1章の言葉を思い起こさせます。

「**神は言われた。『光あれ。』そして光があった。**」（創世記 1:3）

神様の言葉は、**神様の「意思」そのもの**です。人間の言葉と違って空しく戻っては

来ないどころか、**神様の言葉は、言われたとおりのことが必ず実現する**のです。今、ここで、恐るべきことが起こったのです。**イエス・キリストの言葉は、死んだ者にも届く**、という事実を見せられたのです。そして、この場に居合わせた人々は、主が「今、あなたの起きるべき時だ」と言われたなら、**その言葉どおりになる**という、神様だけがなし得る現実を目の当たりにさせられたのです。

[3] 「憐れに思っ」

しかし、私たちが注意をしなければならないことがあると思います。それは、イエス様を、何か**スーパーマンか超能力者**のように捉えてしまったら、それは聖書が伝える「救い主」ではないということです。この物語の中で特に注目すべき言葉は13節です。「**主はこの母親を見て、憐れに思い、**」というところです。

「憐れに思う」。これは、「そうか、イエス様とはお優しいお方なのですね」ということで済ませることが出来ない表現を聖書はわざわざしているのです。この「憐れに思う」とは、むしろ私たちの臓腑（内臓）を示す単語が使われていて、その意味で、その表現は、**単なる同情ではなく、「はらわたが千切れるごとくに痛む」というような意味**なのです。私たちも、あまりに辛かったり苦しいことがあると胃がキリキリと痛むということがあるのではないのでしょうか。イエス様もそのようだと言うのです。このお方は正に痛む**肉体をもって、地上に来て下さった神の独り子**でいらっしゃるのです。「**深く憐れんで**」という表現は、皆どれも、イエス・キリストと結びつけて福音書は表しています。彼は、私たちの為に痛まれる方です。ご自分のことではなく、**一人の市井の人間の痛み、悲しみに、内臓を痛めるほどに心を寄せられるお方**なのです。旧約聖書・イザヤ書53章の中にあるあの言葉を思い起こさせます。

「**彼は多くの痛みを負い、病を知っている**」（イザヤ53:3）

このお方が、「**もう泣かなくともよい**」とおっしゃったのです。ナインの町で暮すやもめのただ一人の息子の死。恐らく10代半ば位の少年です。父親はもういません。女の手ひとつでやっとここまで大きくなってくれた。どんなに愛しい思いで一緒に生きてきたことでしょうか。その息子がなぜ死んだのでしょうか？ 何も書いていません。恐らく重い病気になってしまったのかと思いますが、分かりません。不条理なことがあったのかも知れません。事故死だったのかも知れません。或いは他の理由か…。いずれにせよ、「死」は、時に非常に**残酷に、暴力的に、突然**のようにやってくることもありますよね。そのような時、私たちはその現実をしばらくは受け止め切れないのではないかと思うのです。

主イエスは、この現実の只中に、あえて、足を踏み入れられた。タイミングがそうだったのかも知れませんが、私にはそう思えて仕方ありません。

先ほど私は、イエス様の「**もう泣かなくともよい**」という言葉は、その現実を自分が引き受けなければ言えない言葉ではないかと申しました。そしてそれは同時に、も

うあなたの涙は必ず止む時が来るという**約束の言葉**でもあると思います。その意味でここでもう一つ注目したい言葉があります。それは 15 節後半の「**イエスは息子をその母親にお返しになった**」という言葉です。これは実は、「**与えた**」という意味の単語が使われています。新しい訳の聖書では「**お渡しになった**」となっています。細かいことかもしれませんが大きな違いだと思うのです。「**返す**」という場合、まるでその少年の命は母親のものであるかのようです。そうではなく、「**与える**」或いは「**渡す**」と言う時は、**この命の所有者は神様**であって、その命を、イエス様を通して**贈り物**として、母親は**新しく受け取った**、ということになると思います。そのことこそが、「もう泣く必要はない」という意味なのではないか。つまり、「**この子の命は、わたしが形作った、わたしのものなのだ。わたしが責任を取る**」ということではないでしょうか。

[結] 私たちの命はだれのもの？

そう考えますと、この物語は、死んだ者が生き返ったおとぎ話のような奇跡の話なのではなく、**私たちの命の本当の所有者は誰なのか**、という話だと思うのです。

私たちはいつの間にか忘れてしまっているのではないのでしょうか。「**命**」は自分のものではなく、**贈り物として神様の御手の中にあること**を。そして**思い違い**をしてしまっているのではないのでしょうか。「**死**」とは人間にとって“**自然**”なことであると。「**死**」は、聖書によれば、**人間の、神様に対する裏切り、反抗によって私たちの中に入り込んできたもの**なのですよね。初めに神様が与えて下さった**エデンの園**には「**死**」はありませんでした。「**死**」という悲しみ、苦痛、不条理が入ってきたのは、私たち人間の**罪の故**です。まず、そのことを受け止めなければいけないのだと思います。

けれどもそのことを受け止める時にこそ、そのことを**悔い改めると同時に**、私たちは**喜び**を持って知ることが出来るのです。既に、この「**死**」、「**滅びの死**」は、イエス・キリストが「**それはわたしが引き受けるのだ**」という、**十字架という身代わりの死**によって**既に乗り超えられていること**を！「**もう泣かなくてもよい！**」という時代がやってきているのです。私たちの命は、イエス様の**深い憐れみ**の中に置かれています。だからこそ、イエス様は、本来ならば**私たちが裁かれなければならない裁き**を十字架という形で受けて下さいました。そして、全く人間として、**死体として葬られて**下さいました。しかし、——これが**キリスト教の福音**の最も大きなことなのですが——神様の御力によって**およみがえり**になりました。私たち罪人に、**復活の命**を用意して下さいました。これは、私たちすべての人間に対する、**神様の圧倒的な「赦し」**です。創世記にある、罪に墮ちる前のような**楽園で憩うお約束**がそこにあります。

この、神様がして下さいました救いの出来事を、私たちは、**ただ「アーメン」**(そのとおりです)と受け取りさえすれば**良い**のですね。何と感謝なことでしょうか！

16 節にこうありました。「**人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。**」

主イエスは、旧約の時代に現われた大預言者の単なる再来ではなかったのです。イエス・キリストは、憐れみ深い、私たちの救い主です。「神はその民を心にかけてくださった」。主イエスが、この私を、私たち一人ひとりを、本当にこの世にたった一人しかない命として、心にかけてくださった。私たちはこのことを感謝し、賛美するために今日もここに集められているのです。

お祈り致します。

命の主よ、あなたの御名を賛美します。

あなたの深い憐れみを心から感謝致します。私たちの命は、あなたの大きな愛の中にあることを今朝もみことばから教えられ、感謝致します。

あなたは私たちの悲しみと罪を引き受けられるお方。そして、十字架のとりなしと贖いによって私たちをみもとに招き、また、およみがえり下さって、私たち一人ひとりを、復活の約束の中に今、歩ませて下さいます。どうぞ、私たちの人生の旅路を、あなたへの賛美と、また、まわりの人々との愛の中に導いてください。

今、特に人生の試練、悲しみ、苦しみの中にいらっしゃる方に、あなたご自身が御手を触れ、また慰めと励ましの御声をかけて下さいますように。

私たちの主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。

アーメン。